

アクティブラーニングの改善を目的とした 形成的ルーブリック評価の探索的開発

水野正朗（愛知文教大学） 副島孝（愛知文教大学） 坂本篤史（福島大学）
中村陽明（三重県立四日市南高等学校） 柴田好章（名古屋大学）

キーワード：深い学び、練り合い、納得解、間主観的な合意形成

1. 研究の目的

アクティブラーニング（以下、AL と表記）は一般に、「学習に対する学習者の能動的な参加」を目指し、グループワーク、ディスカッション、ICT の活用などの諸活動を取り入れ、認知プロセスを外化（アウトプット）する学習活動と見なされる。現在、アクティブラーニングは、大学教育の質的転換の方策として、また初等中等教育における授業改善の決め手として半ば強制力を伴って推進されようとしている。AL が大学、高等学校をはじめ多様な教育現場で試みられた結果として、すぐれた授業実践もある反面、AL の導入によって講義型の授業よりも活発な学習活動になったが、授業の進捗が遅くなる上にかえって学びが深まらない、という悩みが指摘されるようになった。AL において問われるべきは、学習形態の変更そのものではなく、学習の質と内容が向上したかどうかである。

本研究は、アクティブラーニング型授業の一つとして「協同学習」の方法を主に用いるが、相互対話がなされ、主体的な学習活動が活性化している教室では、知識がいかにして共同的に構成されているのかという普遍的な課題に研究関心をもち、授業における対話（相互作用）や、問題解決に向けた探究活動の質と内容を高めることを課題とする。

対話による知識の共同構築過程を形成的に評価基準としてルーブリックを、①学習者（個と集散）の個性的な思考の様々な発展過程に即して探索的に開発し、②実験授業することは、学びに「深さ」をもたらす学習原理の解明につながるだろう。それは学びを深めるALの授業設計と改善に対して一定の指針となる可能性がある。

本研究の目的は、対話にもとづく個人と集団の相互関連的な思考発展の背後にある原理（個と集団の思考の深まり）を捉えることを狙いとし、「深い学び」（Deep Learning）を形成的に評価するルーブリック評価法を探索的に開発することである。

2. 研究方法

認知プロセスの外化と、学習共同対における共有の過程に着目して、対話によって知識が共同構築される過程を評価する基準を作成するため、3段階からなる調査研究を行う。

【第1段階：AL型授業のイメージ調査】

現職の学校教員が現段階でALをどのようなものと考えているかを調査するため、学校教員（約100名）を対象に「ALと聞いて、どんな授業をイメージしますか」と質問し、

自由記述の方式での回答を得る。それらの回答群の特徴を、書かれたキーワードを手がかりに分析する。

【第2段階：ルーブリックの評価項目の探索的作成】

学校教員（約40名）を対象に、生徒同士が比較的良好に学び合っている授業（中学校・国語）の授業ビデオを視聴し、さらにその授業の逐語記録を分析した上で、その授業の学び合いの過程を様々な評価する評価語（評価基準）を考えて記述してもらう。

【第3段階：実験授業でのルーブリック評価の実施】

①調査研究1・2の結果分析と、実験授業で用いられた学習課題の特質を踏まえて、対話による知識の共同構築過程を評価するルーブリックを探索的に作成する。

②相互対話によって知識を共同構築する過程を有する実験授業を実施する。

③作成されたルーブリックの評価基準によって、実際の授業過程を生徒自身に自己評価・相互評価させ、その評価についての感想や意見を記述させ、改善に向けた話し合いを行わせる。

④授業者と研究者も同じ評価基準を用いて、その授業過程を評価し、③の自己評価・相互評価の結果と照合しながら分析を進める。

3. 結果と考察

【AL型授業のイメージ調査の結果】

ALがある特定の授業方法を指示するものでないため、ALの授業イメージは教員ごとにさまざまであるが、教師自身が理想とする授業をイメージする傾向が顕著であった。内容的には、生徒自身の積極的な学習活動をイメージしたものが多く、AL経験者の場合、思考の相互関係や合意形成の過程に着目した記述も見られた。

【ルーブリックの評価項目の探索的作成】

生徒同士の学び合いの過程、対話の過程における考えの違いや共通性に着目した教員が多かった。学習課題をどのように作成するか、生徒同士の学び合いを活性化させるにはどうしたらいいか、教師は生徒から出されるさまざまな意見をどのように扱って司会しているのかなど、ALにおける教師のあり方についての意見や疑問が多く提出された。評価基準を他から流用するのではなく、単元や学習課題、生徒の状況に応じて教師自身が考えて作成することは容易ではないが、むしろそれが教師の授業理解を深めることが示された。

【実験授業でのルーブリック評価の実施】

生徒たちには自分たちの学習活動を自ら評価する経験がほとんどなかったため、当初とまどいも見られたが、目指すべき授業の目標と評価の基準が明示されることに好感し、生徒たち自らが授業過程を評価して、その改善に取り組むことについての賛意が得られた。

今後の課題は、授業評価と改善の手続きをより明確なものにし、生徒たちが学習過程の評価基準の改善や再評価に共同参画することが、認識の深まりと学習の転移にどのように寄与するかをさらに詳しく検討することである。